

げられているものも多く見られた。漆喰で鬼瓦の幅を広げたものも見られる。



棒漆喰と鬼瓦

### 棟と鬼瓦について

棟<sup>のし</sup>熨斗瓦は一般に肌熨斗二段の上、熨斗を奇数積むのが基本である。数寄屋建築は「積み熨斗」といって積みきりにするのは、蔵と違って軽快な感じに見せるためである。

棟の最上部に葺いてある瓦を雁振瓦<sup>がんぶりかわら</sup>という。通常は丸瓦の一端に鑊<sup>つば</sup>を付けた形のものを用いるが、住吉では箱の型をした箱棟も見られる。

棟の両端には面白い鬼瓦がある。鬼瓦には決まりがなく、昔は「鬼師」と呼ばれる職人が腕を競っていた。型紙などはなく、職人の頭の中にあるデザインで手作りしている。現在、全国的に見て、鬼師は非常に少数になってきている。

その昔は、鬼瓦には厄除けや魔除けの意味があり、口の形は「阿吽<sup>あうん</sup>」で一對になっている。寺の仁王像や神社に見られる狛犬などが「阿吽」の代表である。「恵比寿さんと大黒さん」「鶴、亀」など言葉の遊びや縁起担ぎでつくられている。

住吉では見られなかったが、大黒さんが百万円と書かれた袋を持っていたりするものもあり、鬼瓦には、ちょっとちゃめつけも見られる。



鬼瓦「阿」



鬼瓦「吽」



大黒さん

### まとめ

将棋の駒のような、単純な形体をした蔵ではあるが、随所に職人のこだわりや知恵が見られ、屋根の部分だけを取上げても、蔵の建築はとても興味深い。最近では生活の変化等で蔵が造られることはほとんど無い。造ろうとしても、材料も手間も普通の建物の3倍はかかる。蔵に携わる職人の経験不足の問題も出てくる。

蔵を建築の費用面だけで考えても、蔵が現存することは、まちの貴重な財産である。積極的に保全活用していくことを考えたいものである。幸いにも住吉には多くの蔵が現存している。蔵の屋根を見ながら、みんなで縁起物の鬼瓦やケラバ、「住瓦庄」の刻印のある瓦等に注目しながら、まちあるきを楽しんでみられてはいかがでしょうか。

# 蔵のあれこれ

住吉蔵部／阪田晴宏

## はじめに

「くら」には「倉」、「庫」、「蔵」の漢字があてられる。ニュアンスがそれぞれ異なるようであるが、住吉で風格のある町並み景観を醸し出している「くら」は家屋敷の一隅に建てられた「蔵」である。町家に付属する蔵として現存する最古のものは、たつの市下川原にある「小林家住宅土蔵」(図1)で、切妻本瓦葺、妻入り三階建て、漆喰壁総塗り込め、江戸初期(1656年頃)の建築と記されている\*1。



図1 小林家住宅土蔵

では、住吉の蔵はいつ頃建てられたのだろうか。「住吉の成り立ちと蔵の分布」や「蔵所有者に聞く」の章で触れられているように、約100年前の明治末から大正にかけてである。住吉区帝塚山、阿倍野区北畠付近に開発・分譲された土地に船場の商人たちが家屋敷を構え、同時に蔵が多く建てられた。2011年の目視調査によると住吉区全体

で114ヶ所の蔵があった(住吉大社内の5棟と若松神社の1棟を含む)。かなりの数といえる。

## 蔵の役目1- 耐火性

蔵の役目は何か、と考えると「代々受け継がれてきた家宝」などの大切な財産を火災や風水害などの災害や盗難から守ることにつ

きる。1950年の建築基準法により屋根・外壁・軒裏は不燃材料で仕上げなくてはならなくなったこと、その後それに応えるように新建材が流布したことで火災は減った。現在われわれがイメージする火災件数は比較的少ないが、江戸期から戦前までは今よりもかなり多かったと想像できる。『守貞漫稿』によると「また土蔵造り、および塗家にあらざるものを号して焼き家と云うなり。火災には必ず焼失する故なり。」とあり、江戸期は火災が多かったこと、しかし土蔵は焼失することはなかったことが推察できる。

これらのことから火災が起きてても大事なものを焼失させないこと、つまり蔵の役目として耐火性が一番だったと考えられる。以下、そのためのさまざまな工夫を見ていく。

まずは壁。通常日本の伝統的な建物の外壁は(柱梁が露出する)真壁であるが、蔵は(柱梁が外壁材で覆われる)大壁で仕上げられる。火災に対する備えであろう。壁厚はどうか。実測調査を行った伊藤家蔵は約20cm、「蔵」のギャラリー CLASSIC では40cm近い厚みだった(これらの厚みが結果的に耐震にも利いているのかもしれない)。そして漆喰仕上げである。漆喰には耐火性や調湿作用があるので、延焼を防ぎ、また収納物の保存には良い。